

発行所
読売新聞社
東京都千代田区大手町1-7-1
郵便番号 100-8055
電話 (03) 3242-1111

生活

12版

1999年(平成11年)1月29日(金曜日)

(第三種郵便物認可)

閑散とした駅の公衆電話改札口に座り込む少女……。カメラが切り取った都会の風景から現代人の心の様子をさらえよという試みを、東京の大学生たちが5年前から続けている。彼らが目で探した「現場」写真の数々と社会的考察からは、ふたん見えにくい生活の変化が浮かび上がっている。

大学生が探る
東京 94-98



後藤範重助教授

社会学の授業

写真を撮っているのは、日本文理学部の後藤範重助教授。社会学が担当するゼミの並べて見ると、時代の変化が

学生や非常勤で教える法大、映し出される。特にそうした立正大の学生。現実離れしが変化がよく現れているのは、ちな学生に社会をよく観察させようとして、1994年から授業の一環で指導したのがきっかけだ。街で撮った写真に、社会学的な考察を加えたりポイントを提出させている。

写真が語る「現代の風景」



新幹線の改札口前に座り込む少女を撮った「現場」としての東京」(日大・児島知之さん=98年)

生活の変化映し出す



がらんとした公衆電話近くで携帯電話のアイロニー(皮肉)」(日大・浅沼伸介さん=98年)

ポケベルに違和感 (96) → 公衆電話前で携帯使用 (98)

「だれかと話しているも携帯電話で第三者が介入でき、日常の時間を分断する。現代人がそうした断片をつなぎ合わせて暮らしていること、学生たちは敏感に反応している」と、後藤さん。ゼミ生の荒木俊之さん(22)も「知ってはいませんが、実際に見たことのないものがかいかに多いか、気がかされた」と言う。

「ライブハウスの熱狂やフテン系の音楽で心を満たす男性の部屋を撮った写真もあった。生活が断片化しているから、イバントやモノを通して心の安定を求めようとする現代人の心が垣間見える」と、後藤さんは言う。

毎年の写真のうち30点前後を日大の秋の学園祭で発表。

ホームページ (http://www.ahs.nihon-u.ac.jp/soc

dpit/gotchoh/kyojo.ht

ml)でも公開している。